


和辻哲郎の『古寺巡礼』

和辻哲郎を知りたい！




1897-1986(明治30-昭和35)

哲学者、評論家。兵庫県出身。東大教授。夏目漱石に師事。ニーチェ、キルケゴール、また、仏教美術、日本思想史の研究者。西洋哲学を日本の精神的考察のなかに穿し、独自の哲学体系としての倫理学を定立した。昭和30年(1955)文化勲章受章。『停止観(しよう)』思想の歴史をいっぺんに読み、その考えの重要な一歩を歩いた。また『停止観(しよう)』の考えの重要な一歩を歩いた。また『停止観(しよう)』の考えの重要な一歩を歩いた。

第5回 研究員のオススメ本紹介コーナー

『和辻哲郎の『古寺巡礼』』

今回ご紹介いただいた三康文化研究所研究員は…！



柴田 泰山 (しばた たいせん)
専門分野: 中国仏教、浄土宗学

新年のご挨拶にてお届けいたしました。本館書店ではオンラインでもお取り扱いしております。最近では和辻哲郎の『古寺巡礼』も好評です。ぜひお読みください。今回のテーマの範囲には、和辻哲郎に関する書物の紹介がなされています。

和辻哲郎の『古寺巡礼』

第六波とともに2022年を迎えたような感じがしております。昨年からは電もり状態が続き、多くの人が「コロナ禍が終わったら旅行に行きたい」と心から思っていることでしょう。今でこそネットに繋がれば、行き先のさまざまな情報を簡単に入手することができますが、その昔は旅先案内の本がたくさんあったものです。この旅先案内の本にさきかけて、ある意味で旅行記、また別の意味では見仏記として、一世を風靡した書物が和辻哲郎の『古寺巡礼』です。本書を読んだ人は誰も、「いつかこの本を片手に、ここにある寺院をすべて訪問してみたい」と思うことでしょう。

和辻自身は仏教美術に対して旧制一高時代から興味があったようであり、大学時代には同會天心の東アジアの工芸に関する講義を受け大きな影響を受けています。この和辻が大学時代にケールから薫陶を受け、若干20代で刊行した書物が『ニイチェ研究』と『セレン・キルケゴール』であります。この二書を通じてヨーロッパを考究した和辻が、日本と日本文化を正面から考察しようとした著作が『古寺巡礼』であると見ることができます。

『古寺巡礼』は、法華寺十一面観音、薬師寺吉祥天女、百濟観音、法隆寺金堂壁面など、仏教美術の至宝の数々を、和辻の視線を通じて主観的な鑑賞と感想が語られた、実に稀有な内容と性格を有する一書であります。和辻自身、『ニイチェ研究』の冒頭において

現なのである。直接にして純粋な内的経験とは、存在の本質として生きることを意味する。認識する主体と認識される客体とがあつて、その間に認識の形式に依らざる直接な本質の感得があるというのではない。直接な内的経験をもし直観と呼ぶならば、この直観は「生命そのもの」として生きることなのである。もとより「宇宙生命」は不断の創造であるから、直接な内的経験も創造的に活らく、自己表現はこの創造活動である。芸術や哲学は皆ここから生まれる。ところでその材料となっている感覚思维などもまた同じく根本力の創造活動から生まれたものであるゆゑに、複雑多様に生を彩つてはいるが、それ自らは象徴として生の本質を暗示しているに過ぎない。(『和辻哲郎全集』1・41頁)

と論じているように、「直接にして純粋な内的経験とは、存在の本質として生きること」であります。この視点から和辻の仏像鑑賞を考えると、おそらく和辻は仏像の存在の向こう側に「宇宙生命」を見出し、これを自らの内的経験として言葉を通じて表現することで、自己が自己の「生命そのもの」として生きることを実現しようとしたのかもしれない。

なお本書には初版から再版に際して大きな加筆や訂正が施されたこと、そして初版の仕様が若い時代の和辻の瑞々しい感性が顕著に現れていることが指摘されています。三康図書館には『古寺巡礼』の初版も再版も所蔵されています。どうぞ実際に手に取っていただき、和辻の感性や直観に触れてみてください。



柴田研究員による選書コーナー

和辻哲郎の『古寺巡礼』

No.	資料名	著者名	出版者	請求記号
1	古寺巡礼 初版(1920年)	和辻哲郎(1889-1960)著	岩波書店	ヨミ2-544
2	古寺巡礼 改訂版(1947年)	和辻哲郎(1889-1960)著	岩波書店	ヨミ2-544カ
3	ニイチェ研究	和辻哲郎(1889-1960)著	筑摩書房	キオ3-690
4	ゼエレン・キエルケゴオル	和辻哲郎(1889-1960)著	内田老鶴圃	ルモ2-330テ